

直哉兄

この世に生きて君とあい

君と一緒に仕事した

君も僕も独立人

自分の書きたい事を書いて来た

何年たっても君は君僕は僕

よき友達持つて正直にものを言う

実にたのしい二人は友達



実篤には、志賀直哉という学生時代からの親友がいました。二人は性格がとも違ったので、時には大げんかをして、何度も絶交しています。それでも、お互いに一番分かりまする友たちでした。

「直哉兄」は、志賀が87歳で病気で寝込んだときに、お見舞いに贈った詩です。自分らしく、その人らしく、ちがうところも認めあえる、一生の親友。あなたにも、そんな友たちがきつとできますよ。



冬瓜と南瓜 昭和41年



「星と星」 昭和35～40年

◆私は生れた

〔この道〕昭和40年6月号より

◆友達の喜び

〔白樺〕大正6年10月号より

◆直哉兄

〔昭和45年11月15日 色紙より〕

もっと知りたい

武者小路実篤

詩1

ともだち

武者小路実篤には何人ものよい友だちがいました。そんな実篤の詩には、本当の友だちを持つ喜びがあふれています。

本当の友だちって、どんなものでしょう？

友だちのよさを感じたら、あなたもきっと詩を書きたくくなりますよ。

私は生れた

私は生れた

君も生れた

この地上に

人間として

自分の本心をいつわらずに

君と仲よく

生きられる喜び。

友達の喜び

友達と話しして、

話はずんで来て、

二人の心が、

ぴったり、ぴったり、あつて、

自づと涙ぐむ時、

人は何者かにふれるのだ、

何者かに。



友情 昭和45年



野菜園 昭和48年



この絵の鳥が一羽一羽ちがうように、自分と友だちは別の人間だから、どんなに仲が良くても、時には意見がちがうのは当たり前。

自分とちがう人とも友だちになれて、無理に合わせたり、がまんしたりしなくても仲良くできたら、あなたの世界はぐんと豊かになるでしょう。

本当の友だちと一緒になければ感じられない喜びも、あるんですね。